

## 「ききづらさ」をかかえる

## 子どもたち(中編)

目の前の人の話を聞こうとする、「その人の話し声以外は無音」ということはまずありません。実際にその場に様々な音が存在して

ますが、話を聞いている間は気づかないことがほとんどだと思います。たとえば騒がしい宴会の席であっても、興味ある噂話を聞きたいと思えばその声は大きく増幅し、周囲のざわめきは小さくなり耳に入ってくるきません。しかしそのざわめきの中に、不意に自分の名前が出てくると急に大きく聞こえてくる、そのような経験は誰しもあるのではないかと思います。

## 「選択的注意」の役割

人の脳は、沢山の情報を同時に処理することはできないので、周囲の感覚情報の中から必要な情報を取捨選択し、その中でも特定の情報に注意を向け、それ以外の情報を無視する「選択的注意」という

認知機能があるおかげで、特段意識をしなくても効率良く必要な情報を得ることができます。

聴覚の「選択的注意」は、先に述べたような宴会の席の例で「カクテルパーティー効果」といいますが、騒がしい環境下でも注意を向けた音は増幅されてよく聞こえ、他の音は減退し聞こえなくなり、また注意の矛先が変わればその音の増幅が起こり聞こえてくるというように、この機能のおかげで耳から入ってくる音情報を認識し、内容を理解して脳に知識を蓄えていくことが可能となります。

## 「ききづらさ」をかかえる子どもの苦労

聴力は正常なのに、「選択的注意」の機能が生まれつき弱い子どもは、目の前の人の話を聞こうと思っても、周囲の環境音にうもれて内容が聞き取れなかったり、何とか話に注意を向けても、持続して聞く

ことが困難で疲れ果ててしまったり、「ききづらさ」は見た目にもわかりにくい上に、本人も周囲との「違い」に気づいていないことが多く、何で自分だけうまくいかないのか、一人で悩んでいることもよくあります。「選択的注意」の機能を持つ周囲の大人や子ども達から見れば、「人の話を聞けない子」としか目に映らず、叱責や仲間はずれの対象となっているのではないのでしょうか。

## APD (聴覚情報処理障害)

このように、「聞こえ」には問題がないのに「聞き取れない」という症状がある場合、「APD (聴覚情報処理障害)」が疑われます。そのような子どもの存在(大人も)は、ここ数年テレビでも取り上げられるようになりました。

ただ、まだ詳しい原因はわかっておらず、明確な治療法も確立されていません。また、発達障がいに伴うAPDもあれば、そうでない他の原因がある場合もあり、診断そのものも難しく、相談できる医療機関や療育機関も非常に限ら

れています。

このようなAPDの症状に苦しむ子どもたちは、教室のように環境音の多い場所では、自分だけの努力で必要な聴覚的情報を得ることは困難であり、「合理的配慮」を必要としています。今回はAPDの具体的な事例や、実際の配慮の方法について、いくつかお伝えできればと思います。

文書寄贈 NPO法人こころ・コミュニケーションの発達支援

ケーションの発達支援

